公益財団法人そらぷちキッズキャンプ　2020年度 活動実績報告（概要）

『更に外出が難しくなった 闘病中の子どもたちや家族に“ちょっとした楽しみ”を贈りました』

●ウォールステッカーギフト

北海道に棲む動物を描いた、貼ってはがせるウォールステッカーをオリジナルで 500 セット製作。全国各地の協力小児科医（病院）へ郵送し、病室の子どもたちと楽しんでもらいました。

「病院で貼られたステッカー」

●おうちキャンプ用品ギフト

これまで全国各地からキャンプに参加した、1000名を超える子どもたちや家族へ、コロナ禍見舞い（お便り）を送付。その中で、ギフトの募集を行い、希望者にはキャンプ用品をプレゼント。おうち時間が長くなったタイミングで、安全にキャンプの雰囲気を感じてもらいました。

「キャンプ気分を楽しむ家族」

●スノーギフト

雪の積もらない地域にある小児病院や闘病中の自宅へ、キャンプ場に積もった雪を専用のスノーボックスに詰め、冷凍空輸で贈りました。初めて雪に触った子どもたちも多く、とても喜んでくれました。

「雪の積もらない地域の小児病院のプレイルームで雪だるま作り」

『同居する 1 家族のみを対象とし、感染対策を徹底したキャンプを開催しました（計 15 回）』

●日帰りキャンプ 14 回　～北海道在住～

緊急事態宣言解除後の 6 月から 10 月までのあいだ、キャンプ場の近隣にある滝川市こども発達支援センター、旭川子ども総合療育センターの利用者を中心に、1 家族限定の日帰りデイキャンプを週末 12 回開催し、12 家族 47 名の子どもたちや家族に、馬アクティビティや森のたんけん、芝生あそびなどを楽しんでもらいました。
また、1 月下旬にも、1 日 1 家族限定のデイキャンプを週末 2 回、雪の中で開催し、北海道内在住の 2 家族 7 名を招待しました。

「乗馬後の馬とのふれあい」

●宿泊キャンプ 1 回　～成田赤十字病院～

秋には、宿泊を伴うキャンプを1回開催しました。小児がんとたたかう子どもと家族（茨城県在住 1 家族 4 名）を、主治医同行のもと、2 泊 3 日で招待することができました。家族一緒に乗馬や森たんけん、アーチェリー、焚き火でおやつ作りなど、北海道の自然を満喫してもらいました。

「家族みんなで焚き火おやつ」

「２０２１年１月２６日（火）北海道新聞（朝刊）記事」

地域から

そらぷちキャンプの夢 ㊤

闘病の子笑顔に 1150人招待

発信・滝川

滝川市江部乙町の丸加高原の青みが残る草はらで、昨年11月中旬、馬に揺られて笑みを浮かべる少年がいた。小児がんと闘う茨城県の12歳。病気や重い障害のある子供の「そらぷちキッズキャンプ」を、家族3人と訪れた。薄く雪化粧した暑寒別岳を望みながら馬場を一周し、「もう1回乗りたいなあ」と、はにかみながらスタッフに伝えた。

念願の馬乗り

少年は成田赤十字病院（千葉県成田市）で病と闘いつつ、馬に乗る小さな夢を温めてきた。この日は家族と手をつなぎ、白い息を吐きながら馬場を訪問。当初は硬かった表情も乗馬で和らぎ、午後には焼き芋も頬張った。キャンプの2泊3日は、瞬く間に過ぎた。

そらぷちは、同名の公益財団法人が運営する医療ケア付き自然体験施設。森に囲まれた16㌶に医療棟や宿泊棟などを整え、ツリーハウス、野菜が収穫できる庭もある。年10回ほど子供たちを無料で招いてきた。

新型コロナウイルス感染が広がった本年度、そらぷちは宿泊受け入れを見合わせていた。それでも今回、成田赤十字病院の主治医らは「今後、より厳しい治療が始まる。励みになれば」と施設との協議を進めた。

雪をまとった暑寒別岳を望み、乗馬を楽しむ少年。この日はスタッフの付き添いで、２回馬に乗った＝昨年11月

国内ただ一つ

少年と家族、医師らがキャンプを熱望したのは、そらぷちが国内唯一の施設だからだ。看護師ら非常勤も含め約10人の職員がいる。同行した高橋聡子医師(40)は「医療体制が整っていて安心。闘病中の子供を受け入れる自然体験施設は他にないんです」と話す。

今年はそらぷちの構想始動から満20年。夏からは本格開園後、10年目に入る節目の年だ。

構想は２００１年、聖路加国際病院（東京）の細谷亮太医師（現そらぷち代表理事）らが、米国の同様のキャンプを参考に「日本にも施設を」と立ち上がったのが始まり。賛同者で国土交通省幹部だった故松本守さんが、滝川出身だった縁もあり、自然豊かな滝川が選ばれた。

構想に対し、市は土地の無償譲渡などで協力。寄付で運営を支える企業・団体も徐々に集まった。04年度に試験的にキャンプが始まり、12年度に施設が整った。天に召された子供も含め、本年度までに全国から延べ約１１５０人が訪れた。

子供は回復後も、長期入院による社会とのギャップに直面する。キャンプはその試練を乗り越える足がかりにもなる。高橋医師は「スタッフや仲間と触れ合い、子供に社会性が育つ。そらぷちの活動は闘病中だけでなく5年、10年先を見据えたものです」と力を込める。

乗馬に笑顔を見せた少年は今、そらぷちの思い出を胸に病床で闘っている。

（滝川支局の小池啓人が担当し、3回連載します）

「２０２１年１月２７日（水）北海道新聞（朝刊）記事」

地域から

そらぷちキャンプの夢 ㊥

募金や人手 市民が支援

滝川 発信

滝川市内の北門信金本店の窓口に募金箱がある。箱には、お日さまがほほ笑むイラスト。重い病気の子供を受け入れる医療ケア付き自然体験施設「そらぷちキッズキャンプ」のキャラクター「そらっぷ」だ。北門信金は2007年から20を超す市内外の全店で募金をし、毎年10万円ほどを贈る。

善意の2億円

年間約1億8千万円かかる施設の運営を、人々の善意が支えている。昨年度は、日本チェーンドラッグストア協会やサツドラホールディングス（札幌）など100を超す企業・団体から総額2億円近くが集まった。

そらぷちの構想が始動した01年から関わる、運営財団の佐々木健一郎事務局長(45)は「初めは支援企業がほとんどなく、提唱した細谷亮太医師（そらぷち代表理事）の人脈が頼りだった」と振り返る。佐々木さんは、月の半分は札幌や首都圏などの企業を回り、子供たちの写真を示して施設の意義を伝え、支援を求めてきた。

軌道に乗ったのは、寄付控除がある公益財団法人になった10年ごろから。16年には同様の施設の国際ネットワーク「シリアス・フアン」（本部・米国）の東アジア唯一の正会員となり、「国際基準を満たす施設として応援してもらえるようになった」と言う。

北門信金本店の窓口に置かれた募金箱。地域の人たちの善意がそらぷちを支える

「マチの誇り」

「そらぷち」は滝川の地名の由来「滝下る所」を意味するアイヌ語が元。約20年かけて支援の輪が広がると同時に、名前の通り、地域の象徴としてマチの人たちの心に刻まれてきた。

「そらぷちは滝川の誇り」と北門信金の船橋儀常務理事(61)は力を込める。金利の一部を寄付する定期預金もあり、その寄付額は累計1500万円。「病気の子供たちに役立てるなら地元企業として光栄です」

支えるのは企業だけでない。農業者グループ「そらぷちファーマーズ」は農産品詰め合わせを販売し、売り上げの一部を寄付。「少額だが、つながれることに意義がある」と山木傑さん(50)は言う。労働力を提供する団体も20ほどあり、滝川消費者協会は毎年、ぬいぐるみ50個を贈呈。滝川青年会議所は木道補修などを買って出ている。

施設では、ボランティア登録して専門研修を積んだ約50人が仕事を担う。管理栄養士の市職員浜田望さん(45)は、新鮮な野菜のカレーなど、病状に合わせて子供が喜ぶ食事を作る。「病院食が多い子供たちに滝川のおいしい物を食べてほしい。喜ぶ顔を見るとこっちもうれしくなる」と笑う。

佐々木さんの夢は、支援の輪を地域でさらに広げることだ。清掃を障害者就労支援施設に委託する計画も進める。さらに多くの人に「『そらぷちがあって良かった』と思ってほしい」。

「２０２１年１月２９日（金）北海道新聞（朝刊）記事」

地域から

そらぷちキャンプの夢 ㊦

子供支える 思い次代へ

発信・滝川

「あの子、今年20歳になるけど元気かな。学校には行けてるかな」―。クリスマスが迫る昨年12月中旬、滝川市にある重い病気の子供のための医療ケア付き自然体験施設「そらぷちキッズキャンプ」の事務所。スタッフ3人がこれまで訪れた子供や家族へのカードを封筒に詰めていた。

職員で看護師の宮坂真紗規さん(43)は「闘病で苦しい時も、カードを見てキャンプでやり遂げたことを思い出せば力になるはず」。キャンプが試験的に始まった2004年から続け、約300通を送る。今回は「コロナ禍 みんなでふんばりましょう」と記した。

返信も届く。キャンプの思い出や回復を伝えるものもあれば、旅立ったと知らせる家族の手紙も。「5年、10年たっても『ずっと見守っているよ』と伝え続ける。それがそらぷちです」。宮坂さんはそう話す。

成長し職員に

そんなそらぷちに5月、「元キャンパーの正職員」が誕生する。奈良県の臨床心理士小西美咲さん(29)だ。下肢の神経まひなどが起きる二分脊椎症で、つえが欠かせない。中学2年で訪れ、高校、大学ではボランティアとして関わってきた。現在は発達支援施設で働いている。

「そらぷちは『また頑張ろう』と思える特別な場所。初めて訪れた時からいつか働きたいと思っていた」と春を待っている。「子供たちはそれぞれ痛みを持っている。自分の闘病経験を大事にしつつ、一人一人に向き合いたい」と力強く語る。

運営財団の佐々木健一郎事務局長(45)は「キャンパーが成長し、職員として施設を支える。開設以来の夢がかなった。美咲はそらぷちの希望」と目を細めた。

VR映像製作

そらぷちは進化し続ける。新型コロナウイルスの感染拡大で満足に活動できない現状を逆手に取り、「病室でも自然体験できるように」と、実際に施設で乗馬しているようなVR（仮想現実）映像をテレビ局と共同製作。来年度から全国の病院に無料で貸し出すなど、新企画に乗り出した。

構想始動から20年。最初に関わったメンバーには鬼籍に入った人もいる。滝川出身で、公園造りの専門家として施設設計や支援企業開拓などに奔走した元国土交通省大臣官房審議官の松本守さんも昨年1月、70歳で逝った。居住地の東京から月1度は施設を訪れ、子供たちと触れ合っていた。

立ち上げの中心人物で運営財団代表理事の聖路加国際病院・細谷亮太医師(73)は「つらい闘病をしている子供がそらぷちで笑顔になっていくのを見るたび、つくってよかったと思えた」とこれまでを振り返る。そして「熱い思いを継ぐ人を育てていかなければ」と、次代に期待している。

子供たちからの手紙を読み返す宮坂さん。キャンプの思い出が、絵や写真を添えてつづられている